

29

教科間の連携を生かした言語活動の充実

鷺見 香織 (岡山中学校・高等学校)

1 はじめに

国語の授業を契機として、他教科との連携の中で言語活動に取り組むこと、発達段階に合った活動内容や効果的な連携の可能性を探ることを目的とした。事前の生徒アンケートにあった「自分で考える力を身につけたい」等も踏まえ、「問題解決のために主体的に考える能力」「チーム内で生産的な対話を成立させる技術」を重視する立場から、高校2年生の授業での実践的な方法について検討した。実技科目との連携のおかげで、言語以外の表現活動との連携の有効性を見出す結果となった。

劇作家の平田オリザ氏の著作に、言語を用いたコミュニケーションについて以下の記述がある。

会話：価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり。

対話：あまり親しくない人同士の価値や情報の交換。親しい間柄でも価値観が異なる時に起こるその摺り合わせ。

対論：AとBという二つの論理が戦い、Aが勝てばBはAに従う。勝ったAの方は変わらない。(ディベート)

また対話的な精神とは「異なる価値観を持った人と出会うことで、自分の意見が変わっていくことを潔しとする態度であり、さらに異なる価値観を持った人と出会って、議論を重ねたことで、自分の考えが変わっていくことに喜びさえ見出す態度」とある。生徒との話し合いでは、コミュニケーション能力の一つの成果が「知らない人から道を尋ねられてしまう力」であるとの結論にもたどり着いた。

勤務校は、一学年が約150名の中高一貫校である。クラス編成の特性上、高校2年生のほとんどは4年を超える閉じた人間関係の中で学校生活を送っていることになる。親しい友人と過ごすことの方が多く、接点の少ない同級生が意外と多い。学習の目標は「大学進学」という意識が強いが、実際には社会に対する問題意識が低く、主体的に世の中に関わろうという姿勢の個人差も大きい。身近な仲間では、省略の多い内輪の会話に終始しがちで、背伸びした議論に挑戦することは滅多にない。だが、大学受験や進学後の研究に必要な読解力や記述力の根本に、主体的な問題意識と言語技能が不可欠であることは論を俟たない。

目指す集団像は、全体がお互いの良い所を積極的に評価しながら、良質の緊張感をお互いに要求し、そうした場を協力して作ることでできる、活気と対話のある集団と設定した。生徒達の主体性を積極的に引き出している実技教科の教員に協力を仰ぎ、活動に「自分のことばで」参加する取り組みを企画した。体系立てることはできなかったが、それぞれの授業時間内で成果と課題を見出すことができた。

2 対話の成立する人間関係……きのくに国際高等専修学校（和歌山県橋本市）

活動や生活集団の運営に対話を活用している先進校として見学に伺った。生徒の思索や実践を中心に、社会と関わりながら学びの本質に触れるカリキュラムの実践で知られる。直接現地に行くことで実感したのは、生徒達が、穏やかな対話を必要な場面で「時間を惜しまず」できることである。生徒の知的好奇心の伸びやかさ、生産的な対話や討論における能力の高さ、それらを支える寛容さ、他者への信頼は一朝一夕に身につくものではなく、競争原理や大量消費資本主義を対象化する学習スタイルとの関係は深いと感じた。一学年が20名と小さな集団でありながら、生徒は寛容で社交性に富んでおり、6～18才の生徒の多くが寮生活を送り、全員の対等な立場による議論と、体験や作文の重視に裏打ちされた生産的な集団を形成している。「待つ」姿勢、「聞く」態度、「信じる」関係が成立した場であった。

3-1 実践 教科間連携「自我像 自覚と表現」

○ 導入 [現代文 5時間] 評論文読解・DVD視聴

「自我」に関する評論の読解から、良くも悪くも存在する「自我」の概念を知り、自我は他者や世界との関わりの中で獲得されていくものである、という考え方に触れさせる。また表現者として自我と向き合いながら、絵画と音楽を自己表現の方法として生きた人物に触れ、自己表現への意識を高める契機とした。

教材：今村仁司「抗争する人間」・阿部潔「彷徨えるナショナリズム」

NHK VIDEO「ぼくはロックで大人になった ～忌野清志郎が描いた500枚の絵画～」

○ 言語による自己表現 [現代文 1時間+課題]

DVD 視聴の感想や人物メモから、「自分が自画像を書くとしたら…」の想定で、描きたいものを文章でまとめると共に、アンジェラ・アキ「手紙～拝啓15の君へ～」の歌詞の一部を作詞する。作詞に際して、自己の将来像を書き出し、実際に未来の自分に宛てて手紙を執筆した上で、詩の言葉をひねり出す、という段階を踏んだ。留意点として、できるだけ具体的に書くこと、予め、自分を表す形容詞と動詞を書き出しておくこと、無理矢理メロディに合わせるより詩としての成立を重視すること、を意識させるようにした。

○ 「自我像 ～現在の自己を見つめ、将来の自己を想像する～」 [美術 7時間] 黒木寛先生

「言語活動を充実させた美術教育」として、選択美術の単科目での活動よりも幅を持たせ、生徒自身がより深く課題を探求する機会を得る活動を目指した。現代文の授業で今の自分と将来の自分を表現した活動と、内容で連携する自画像を題材にし、高校2年生の3学期という時期に自己を見つめ、将来について真剣に考えるきっかけとした。通常は自画像と聞くだけで苦手意識を持ち、制作に素直に取り組めない生徒も多いが、将来希望する仕事に関わる要素を積極的に取り入れるようアドバイスし、視点を広げられたことでスムーズな導入ができた。

制作の合間に作品についての発表やグループ活動の機会を作り、作品に良い刺激となる対話の場を設定した。参考作品の鑑賞後、各自が事前に調べた肖像画について感想を書き、自分についてイメージしたことから、実際の「自我像」の構図や使用する色などを決める。この過程で、グループ内でお互いの制作について発表する機会を持ち、相互に対するイメージなどを伝え合い、自己のイメージをまとめていった。

○ 「編曲に挑戦! 『手紙』～拝啓高2の君へ～」 [音楽 3時間+課題] 松島香織先生

歌詞の作成を通して自分自身を客観的に捉え、内面を曲想に反映させることを目的とし、自分への手紙を書き、自己を音楽で表現する。まず「手紙」を歌う活動を経て、国語科で作成した詩をもとに、「手紙」の作詞をさせる。そして自分で作成した詩を元に表現活動として編曲を行った。編曲の方法は次の3つから選択できる形を取った。

A：既存のメロディに自分の歌詞を当てはめ、音楽表現を考える。

B：自分の歌詞にメロディーを作曲する。

C：歌詞をベースに、自分の得意とする楽器で編曲する。

また、楽譜の作成は任意とした。楽譜作成の負担は技能のレベルに大きく影響を受けるため、自己表現に集中することを優先した。生徒の感想にも表れているが、どの生徒も真剣に取り組んでいた。

- ・新しい歌詞はスムーズにはできなかったが、自分の歌詞をつけたことで私とこの曲の距離が縮んだ気がする。
- ・中学の時に作っていた詩を元にイメージを深めて詩を作った。作文より具体的でいいんだ、と実感した。
- ・作詞による自己表現は奥深いもので、作曲が加わると本当に奥深いものになると思った。
- ・自分の迷いを、共感してもらえるように作った。『自我』がほんのちょっとわかった気がする

○ 「詩を書く」 [書道 1～2時間] 大川秀子先生

国語の授業で作成した詩を、書道の作品として成立させる取り組みに挑戦した。色紙、着色和紙など、素材の選定も、自分の表現したい内容に合わせたものとし、既に書いた詩の言葉のみにとらわれることなく、好きな言葉を選び、自己表現の機会とした。

3-2 実践 教科間連携「対話に挑戦」

○ グループワークⅠ：【夏目漱石「こころ」を読んで、問を作ろう】

自分の視点から小説の表現を解釈することに挑戦し、解釈が成立するか否かを話し合っ、読解を深めることを目的とした。全体を15に分けた章段を、2～3人のグループに割り当て「内容の要約」「見逃さない表現とその解釈」を一枚にまとめる。全部をとりまとめて印刷配付し、担当した箇所について生徒が発問を考え、答えをグループで検討する。問と答えが成立しているものを取りまとめて印刷配付した。成立しているか否かの判断に時間を要することが難点である。

○ グループワークⅡ：【衆院選ポर्टマッチ ～あなたが投票するとしたら…～】

目的：様々な立場を理解すると共に、代弁することで現実に行進している社会問題を主体的に捉える。

- 1) 新聞各社 HP 上のポータルマッチを実際に PC で体験することで、政党毎の主張の違いを確認する。
- 2) [政治・憲法] [外交・原発] [復興・消費税] [金融・社会保障] を担当する四グループを作り、政党ごとの政策の違い、メリット・デメリットを新聞記事で確認し、部門ごとの支持政党を決定する。
- 3) 4つの部門担当が含まれる4人組を編成し、「4人で一票を投じる」と仮定して支持政党を決定する。
- 4) 儒家・道家・法家・仏教の入門書に目を通し、漢文での学習内容を踏まえて、それぞれの思想家はどの政党を推すかについて、グループで話し合いながら類推する。

○ グループワークⅢ：【考える体育・サッカー戦術会議】[体育実技・保健 2時間] 浅野慎司先生

目的：体育実技サッカーの戦術の一つを活用し、対話の場を持つことで、課題発見・解決能力を育む。

- 1) DVD 視聴：授業での自分たちのプレーを客観的に見て、良い点を探す。
- 2) 各グループで見つけた良い点を発表、なぜ良いのかを分析し、意見をとりまとめて、発表する。
- 3) 授業担当者が、生徒の意見を踏まえながら「空間利用」の戦術を解説する。
- 4) グループ内で仕組みの理解の確認、例題に挑戦する。
- 5) 次回の実技の授業で、戦術の精度向上・選手の能力向上・成功率の向上のための作戦を立てる。
- 6) 次時 [実技] → 実技後、振り返り（難しかった点・どうすれば克服できるかについて）

身近な仲間同士の対話成立のために、標準語の敬語を使うよう指示する。日常的に方言を多用する上に、話し言葉に親しさの距離が反映されるからである。対等な対話のために、生産的な制限となるよう上手に伝えて、お互いの距離が均等になる言語を選択させるように心がける。グループ編成も、身近な仲間同士の組み合わせにならないように配慮し、対話の記録が必ず残るように記録担当を決め、リーダーも必ず決めて役割を明確化する。

4-1 授業の手応え ～「自我像」の取り組みから～

美術の取り組みでは、自画像を描くことに抵抗があって積極的に取り組めない生徒が予想以上に多かったが、導入において描き方（バランス・明暗）の説明を丁寧に行うことで敷居が下がったようである。制作前に、イメージを言語化して発表することや、自己のイメージに対する話し合いを行ったことにより、制作に対する意識が向上し、その過程で表現方法を深く考えることに繋がったと考えられる。

また国語科との連携により、「自画像を描く」ことへの目的意識がより明確になった。生徒自身の中で「メッセージを書く」「自画像を描く」の一つ一つの作業が繋がりと、意欲を高める要因にもなった。短時間での制作であったが、下書きまでのエスキースを繰り返し描き直すことでイメージを形にすることができた。また、指示はしなかったが、背景に好きな詩や言葉を書くなど、国語科との連携の影響を感じさせる作品もあった。ただし、生徒の中には関連づけができずに戸惑うケースも見られた。

音楽では、高校1年次に既に5音階による作曲活動をしていたが、条件の制約に加え、楽譜の制作と演奏までを課したため、活動の難度は高めであった。今回は、楽譜の作成の負担を軽減するなどの工夫が功を奏したが、前年度に基礎的な技能の訓練を全体で実施していたことが、今回の伸びやかな表現の土台となっているようである。さらに今回の取り組みでは編曲方法が選択可能で、自分の得意分野を生かすことができるため、結果的に自己表現に時間をかけて集中することができた。特に、言語表現が苦手な生徒は、演奏を選択することで自己のイメージをより一層表現できたと思われる。

その後の授業で「手紙」の二部合唱を行っているが、授業担当者によると「普段の歌唱よりも積極的に自分から表現しようという意欲が、練習の雰囲気表れているのを感じる」とのこと。この要因は、歌詞の解釈と、曲に対する自分なりの理解が既にできているので、歌唱技術だけでなく、曲の世界観も表現しようという意欲が高まり、多角的な表現に自覚的に取り組めたと推察される。歌詞の内容の咀嚼には、通常の音楽の授業ではあまり時間を割くことができないが、今回は「歌うための技術」と「歌う内容」の両方を意識して、さらに内容を自分自身に重ねながら取り組むことができた成果といえる。また、「感動させるために」表現をするというモチベーションを得た生徒も増え、より積極的な歌唱につながったと考えられる。

4-2 授業の手応え ～「対話に挑戦」の取り組みから～

選挙についてのグループワークでは、「自分がどんな考えなのかを少し理解することができたので、考えるきっかけになった」「国のことに興味が無かったが、自分の考えとの違いを知って、興味がわいてきた」などの感想に見えるように、自己理解が対話や主体性の切り口になるという一定の成果は見られた。対極の意見に分かれたグループ内では、生徒は異なる主張を聞き合うことの難しさに触れながら、真剣な話し合いをしていた。

だが、「興味がなかったので、答えを出せない質問がたくさんあった」という感想も見逃せない。高校生にとって2012年の選挙は、3年後の自分には選挙権があることを実感する好機であり、生徒の多くは「初めて真面目に考えた」と答えたが、一方に社会問題に対する意識が極めて低く、全く興味関心がないと答える生徒も10%という結果だった。今後の大きな課題である。

文系選択のクラスで実施した中国思想のロールプレイでは、短時間ながら集中して入門書を読み、半数程度の生徒は、自分の選んだテーマについて視点を抽出できた。柔軟な発想や予想外の切り口による分析も見られたが、時間と情報と知識の狭小さゆえに、総括には至らず部分を扱って終わったこと、偏った理解にならないような全体的な解説ができなかったことが残念であり、地歴公民科との今後の連携がさらに必要であると感じた。

5 考察と今後の課題 ～技能と表現・教科間連携の可能性～

表現の方法として「創作」は有効だが、授業として成立させるには技能とモチーフの両方が不可欠である。創作活動の基礎力の陶冶は、既に芸術の授業で行われているが、全体授業において、技能の習熟度は表現手法の選択に直結すると同時に、技能があったとしても内面が充実していなければ創作のモチーフを得ることができない。そこで、内容の充実においては言語活動も有効である、との視点を今回得たと言える。一方で、平田オリザ氏には「伝えたいことなどない、表現したいことならいくらでもある」との言葉もある。何かを伝えるための手段としての表現や言語だけでなく、純粋な表現活動そのものの魅力に触れる貴重な機会を学校で提供しうことは、心強いことである。音楽選択の生徒のコメント「自分自身と曲の距離が縮んだ気がする」には、芸術科として目指した一定の成果を認めることができ、その後の作文活動の場で「感動した」という内容の叙述のために、適する動詞を時間をかけて厳選するなどの言葉選びへのこだわりには、言語活動としての成果を見出すことができた。十代の生徒にとって、言語活動と適切な表現・実践を組み合わせた集団活動は、有意義であるとの結論を得た。

また身体感覚による無自覚の行動は、客観視と言語化によって、チーム内での意志の共有や実践的な判断へと発展しうる。言語活動は自己を含めた他者理解と、理解したことがらの咀嚼や共有を可能にし、実技は発信力を発揮する実践の場でありうる。

ただし、これらは言語・実技ともにある程度の技能を有した生徒に見られた成果であり、全体の底上げは大きな課題である。また対話が成立しなかった要因は「時間の共有」を尊重しきれなかった点にある。突然の解散総選挙を何とか授業に活用しようと焦ったこともあり、内容を欲張ったが故の時間不足で各々の活動が中途半端になり、対話の中から相互が歩み寄った上で結論を導き出すに至らなかった。中国思想の特徴を踏まえた議論においても、生徒の理解の枠組みが不十分であったために立場が不明瞭な議論に終わってしまった。自己表現におけるモチーフと同様に、他者と向き合うための自己の確立、主体的な姿勢の重要性も思い知る結果となった。中身がなければ、対話は成立しない。土台となる知識や教養を培うことが不可欠である。さらに教科内での適切な評価についてはさらに検討の必要がある。

国語の学力として数値化しづらい内容であったが、生徒からは「幅広い学習ができるので、教科書の読解だけではなく色々な活動を続けてほしい」「長い時間をかけて深く考える力がついたと思うが、それを書いて伝える力が足りないと思う」「視点をいろいろと変えて考える力がついた」「間違っているのを恐れずに答案を書く力(が身についた)」「他の人と意見を交換する作業はよかった。色々な意見をまとめる力がついた気がする」等のコメントがあり、意識や意欲の面での成果は見られた。今後を活用するための振り返りの方法も課題の一つである。

全体を通じて、教員間の知的触発の効果を感じた。各教科がどのような活動によって、どのような力を陶冶しているのか、という実践に間近で触れたことは貴重な経験となった。特に「生徒の活動」が不可欠な実技科目は、生徒の成長に応じて繊細に授業計画が組み上げられており、講義形式に陥りがちな教科にとって学ぶことが多い。「良質なチームを経験した者は、新たな仲間とも良質なチームを形成する」。学校ができることは多いと確信する。多くの先生方の協力を得られたことに心から感謝の意を表す。

参考文献等

- ・平田オリザ「分かりあえないことから」(講談社『本』)
- ・マンガ「孔子の思想」「老荘の思想」「孫子・韓非子の思想」「禅の思想」(講談社プラスアルファ文庫)
- ・2012衆院選 毎日えらぼーと(毎日新聞社 HP 内 [<http://mainichi.jp/votematch/>])
- ・日本版ボートマッチ～2012総選挙版(読売新聞社 HP [<http://votematch.jp/index.html>])